

学位論文題名

1930年代中国の経済建設をめぐる日本関係

—製鉄業と鉄道建設を中心に—

学位論文内容の要旨

本稿は1930年代（南京政権期、1927～1937年）の日中両国の経済関係について、中国側の経済建設と日本の対中国政策との対抗関係を軸として分析することを課題とする。つまり、南京政権期の経済建設がいかなる目的を有するものであり、それが実際に中国経済をいかに変容させたのか、という点を明らかにするとともに、その結果として中国に有する日本の諸権益がいかなる影響を被り、ひいては日中関係にどのような変化を及ぼすことになったのか、について検討することにより、盧溝橋事件に至る要因の一端に接近しようというものである。

分析視角は次のとおりである。第一に、従来の研究が日本側からの視点に偏ってきたことに鑑み、可能な限り中国側史料を利用しつつ、中国側の対応をもふまえた両国関係を描き出すことである。第二に、中国側の対応をみる場合、中央（国民政府）と同様に地方諸機関についても考察の対象とし、中央についても政府部内の対抗関係をも含めた重層的な分析をおこなう点である。第三に、欧米諸国との関係をも視野に含める点である。

また、本稿では、対象部門を製鉄業と鉄道建設に限定した。その理由は、両部門が中国の経済建設の重点事業とされ、かつ相互に関連性を有していたことに加え、日本の権益をめぐる対抗関係が最も鮮明に示されていた部門であることによる。なお、対象地域は南京政権の実効支配が及ぶ関内に限定し、「満州」・台湾は考察の対象外とした。

以上の前提に立脚し、本論では製鉄業（第1章）、鉄道建設（第2章）、華北経済進出（第3章）に区分し、各分野における日中関係を分析した。

第1章ではまず第1節において、中国製鉄業の展開過程を概観し、その特質を描いた後、30年代における生産・輸入動向ならびに政府による確立計画を分析した。ここから明らかになった点は、衰退傾向にあった中国製鉄業にとって、30年代は機械工業の勃興、鉄価格高騰、国内統一の進展などにより復興の好機であったこと、そのため、南京政権ならびに地方政権は新設計画を立案したこと、その

新設計画では、中国製鉄業が当初から有した制約条件（一例として原料炭の不足問題）の解消が図られるとともに、国防的側面が強まっていったこと、である。第2節では、この点をさらに明確にするため、南京政権の重点建設項目である中央鋼鉄廠の建設計画を詳述した。つまり、建設地点、資金計画、原料供給地などが決定されていく過程を描くことにより、同計画が国防建設の一環に位置づけられる過程を明らかにした。第3節では、こうした建設計画が具体化するなかで、日本にとって華中最大の権益である漢冶萍公司がいかなる存在へと化したのか、について分析した。漢冶萍公司は20年代に銑鋼生産を停止した後も、債務関係から日本に対し一定量の鉄鉱を納入するため、鉄鉱採掘に特化した経営を維持していた。南京政権は公司に対し輸出統制を強めつつ、後期には製鉄事業再開を計画するが、このなかで日本はしだいに公司への関与を弱める一方、鉄鉱確保についても日本の輸入全体に占めるウェイトを低下させていく過程を明らかにした。

第2章は鉄道建設に関し、第1節において清末からの鉄道建設の変遷を概観したうえで、30年代の鉄道を、新設計画、建設資金、経営動向、経営政策、国際関係の側面から描き出した。ここから析出された点は、第一に、南京政権期の鉄道経営は概して好調であり、その背景には管理・技術・営業における統一的施策の実施があったこと、第二に、その結果として、ドイツを筆頭とする欧米諸国が活発な鉄道投資を展開していたこと、第三に、建設計画が路線配置の面において国防的側面を強めていったこと、である。続く第2節・第3節では、以上の点に関し実際の建設路線に即して検討した。第2節では、南北縦貫線である粵漢鉄道（武漢—広州）を事例として、同鉄道が国内の政治的統一を促進するとともに、欧米への輸出品の新たな搬出路を形成したことを分析し、このことが日本の地方政権に対する勢力扶植を困難にさせただけでなく、欧米資本の中国投資をさらに活発化させる結果となったことを述べ、ここにイギリスが同鉄道の建設を主導し、日本がそれに反発した理由があることを明らかにした。同様に、第3節では長江下流域を湖南・広東と結ぶ江西・福建両省の鉄道建設をとりあげた。江西省には日本の南潯鉄道借款、福建省には清末からの利権設定の経緯があるが、30年代の建設がこうした日本の利権と断絶したかたちでなされたこと、日本もまた利権維持に対して消極姿勢であったこと、について展開した。

第3章では華北経済進出に関し、山東と冀察（河北・察哈爾両省）を対象地域とし、主に資源開発と鉄道に焦点をあてて分析した。第1節では山東権益の主軸をなす膠濟鉄道について、鉄道材料納入、運賃政策、日本人主任の権限などの側面において日本の権益が侵害されていた実態を描くとともに、日本が利権維持と山西炭搬出を目的として延長線への借款を図るものの、南京政権が山東省政府への影響力を強めつつ、中国側独自の建設が計画されていく経緯を明らかにした。

一方、冀察における経済進出は30年代半ばより本格化するが、第2節ではその提携事業のうち原料炭の運搬を目的に計画された津石鉄道（天津—石家荘）をとりあげ、同鉄道をめぐる対応関係を日本、欧米諸国、冀察政権（冀察政務委員会）、南京政権および華北の諸勢力という各方面から分析した。その結果、日本の経済進出は南京政権および欧米諸国との提携を図ることなく、現地の建設機運をも牽制しつつ、緩衝政権である冀察政権への勢力扶植の一手段としてなされたこと、また華北分離を伴う経済提携は逆に冀察政権の存立基盤を掘り崩すことにより、南京政権の影響力を強める結果となったこと、が明白となった。

終章では、以上の分析をふまえ、南京政権の性格規定、諸外国との関係、地方政権の変容という3方面からの総括をおこなった。まず、南京政権について、国家主導による急速な工業化を目指しつつ、あわせて国内統一と国防経済化という2つの課題を抱えた政権であると規定した。そのうえで、この課題が日本の利権を排除しつつ追求されたこと、実際に中国経済の発展が日本の利権の形骸化につながったこと、これらが日中間対立の要因をなすことを明らかにした。次に、対外関係に関しては、南京政権は可能な限り日本との利権調整を図っており、欧米諸国も宥和を試みたものの、日本は中国主体の経済建設に反対する立場からこれに応じることなく、中国における経済的地位を低下させるなかで、地方政権への利権拡大を図っていく点を述べた。最後に、地方政権の側からの視点として、最後まで自立的傾向を有した華北の諸政権の場合、政権維持のために対日接近を図ったものの、日本の経済進出が資源獲得を目的とする以上、彼らの「保境安民」政策との矛盾を内包していたこと、また、中央からの分離を前提とする経済提携が逆に南京政権の介入を招き、地方政権を反日姿勢に傾斜させる要因となったこと、ここに日中戦争に至る要因の一端が示されている点を展開した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 石 坂 昭 雄
副 査 教 授 田 中 慎 一
副 査 助 教 授 中 西 聡
副 査 助 教 授 川 島 真 (大学院法学研究科)
副 査 教 授 西 川 博 史 (北海学園大学経済学部)

学 位 論 文 題 名

1930年代中国の経済建設をめぐる日本関係

—製鉄業と鉄道建設を中心に—

本論文は、1930年代中国の南京政権期（1927—1937年）における、日中両国間の経済関係を明らかにすることを意図している。とりわけ、南京政権による中国の政治的統一と経済統合・建設が、中国経済をどのように変容させ、それによってこれまでの日本の中国における諸権益がどのような影響を蒙ったか、また、イギリスやドイツなど諸列強の対応などの国際関係のなかで、日本側がこれに対してどのような対抗策を取ったかに焦点を合わせながら、日中戦争の経済的原因の解明に寄与することを目的としている。その際、対象とされる地域を、「満州」及び台湾を除いた、南京政権の実効的支配の及ぶ「関内」に限定し、また、こうした諸政策のなかでも決定的に重要な、近代的鉄鋼産業の創設と鉄道建設を中心に据えている。これに応じて本論文は、大きく4つの章に分かれ、第1章は、南京政権が推進していった、近代的鉄鋼業建設を、第2章では、この時期にとりわけ精力的に推進され、政治的・経済的統合の梃子となった鉄道建設の過程と諸列強の関わりを、第3章では、そのなかでの軍事力を背景とした日本の華北経済進出の実態と、それがさらに日中の激しい利害対立と日本の国際的孤立化と招いて、1937年の日中全面開戦にいたった過程を分析している。そして、終章では、これら実証分析に立脚しつつ、南京政権の性格規定やその歴史的意義の評価を試みている。以下、本論文の論旨を簡単に紹介する。

まず、第1章においては、南京政権の工業化ならびに軍事力自立政策の基幹となるべき鉄鋼業建設計画が詳細に分析されている。すでに清朝末に発足した中国の近代的鉄鋼業は、その後の内戦や輸入品との競争によって大きく衰退していたのに対して、1930年代に入って、機械工業の勃興や、内外の鉄価格の高騰、統一の進展による市場の拡大などの好条件が生まれた。この時に当たって、南京政権は、既存の、日本にも関わりの深い漢冶萍公司の立て直しに代えて、国防経済の見地から、すでに軍事援助や指導などで関係が深かったドイツ国防軍を介して、ドイツの技術と借款（しかもタングステン、アンチモニーなどの戦略物資による返済）による、長江流域での国営一貫製鋼所および軍工廠建設を試み、それは37年から建設が開始された。この間、日本側は、かねて漢冶萍の鉄鉱に大きな利権を有していたものの、これに対抗して現地での鉄鋼生産に進出することもできず、また中国側の動きを牽制するこ

とも不可能であり、中国が漢冶萍の鉄鉱に輸出制限を課していくなかで、鉄鉱山から事実上撤退することになる。

続いて第2章では、この期間の南京政権の本格的鉄道建設政策と、これに対する諸列強の対応が詳しく分析されている。この時代には、まず、第一次世界大戦で脱落したドイツが再び中国へ強力な投資活動を展開し、その借款によって南京政権は、剿共作戦に極めて重要な、杭州—株州鉄道の建設に成功した。このことによって大きな衝撃を受けたイギリスも、従来の路線を転換して、新4カ国共同借款を離れ、単独で南京政権の鉄道事業に借款を供与しながら、鉄道資材の市場を獲得する途を選んだが、その最も大きな成果は、義和団事件賠償金の返還による、清朝末期から工事が中断されていた、広州—武漢を結ぶ粵漢鉄道の完成（1933年起工、36年全線開通）であった。これは、南京政権にとって、きたるべき対日戦争に当たって、香港や海外との新しい連絡路として、戦略的には極めて重要な路線であったのみならず、長江中流地域の第一次産品の対欧米輸出を促進した点でも、大きな経済的意義を有していた。他方、日本は、清朝末以来、南潯鉄道や福建省内の諸線の建設権など、いくつかの鉄道利権を有していたが、日本の実業家たちはこうした事業の採算を危ぶんで投資には消極的であった。結局日本は、ドイツやイギリスの動きを牽制することもできずに、華中や華南では、南京政権の鉄道を梃子とする統一事業を推進するのを黙って看過すしかなかった。

第3章では、こうした背景から、日本が、華北を、経済的にも己の勢力圏に組み込もうとした過程が詳しく分析される。ただし華北になかでも、ドイツから引き継いだ、青島と膠済鉄道を中心とする山東省の権益は次第に形骸化しつつあり、日本はこれに代えて、「満州」に隣接し日本軍の駐屯する、河北、チャハルの2つの省を緩衝地帯として中央政府から分離させ、綿花、コークス炭、鉄鉱などの資源基地として支配しようと画策したが、それはとりわけ、銑鉄を現地生産し、日本に供給して日本鉄鋼業の隘路を解消すること、その輸送路として、津石鉄道を日本支配のもとで建設することを狙ったものであった。

以上の詳細な分析を踏まえ、本論文は、南京政権が、ドイツやイギリスなどヨーロッパ列強の支援のもと鉄道建設を梃子に中国本土の統一を進め、同時に、対日戦争を念頭におきつつ国防体制の基礎となる重工業＝軍需工業の国家主導による建設を積極的に推進した点で、その歴史的役割を積極的に評価している。ただし、南京政権は、可能な限り日本との直接対決はさげ、利害調整を図ってきたし、イギリスをはじめ諸列強も宥和政策をとりつづけた。しかし、日本は、南京政権による統一と日本の利権の形骸化への焦りから、あくまでも華北地方政権の分離とその日本への従属、資源獲得などの経済的支配強化に固執したため、現地の緩衝政権である宗哲元の冀察政務委員会すら、次第に南京政権側に追いやっかし、南京政権もまた抗日に踏み切らざるをえなかったことが明らかにされている。

わが国のこれまでの日中経済関係史研究にあっては、その関心が1920年代に、しかも「満州」や上海に集中し、主として日本側の史料に依拠して進められてきた。それに対して、本論文は、日本の外交文書のみならず、中国各地ならびに台北の文書館でようやく公開されるにいたった南京政権関係史料を渉猟しつつ、盧溝橋事件にいたるまでの南京政権と日本側との対立の経済史的背景について、多くの事実を明らかにし、それに基づいて南京政権の経済政策について新しい評価を下している点、現代史研究に大きな貢献を果たしたものと認められる。

ただし、本研究で取り上げられた、南京政権の重工業＝軍需工業創設の試みが、たとえドイツから全面的な金融＝技術援助を受けたものであるにしても、経済的にも技術的にもなお大きな困難を抱えていたものと思われる以上、それがどの程度まで実現可能であったかを——その多くが、日中戦争の開戦と日本の進撃で中断と設備移転に追い込まれたため、具体的成果で検証はできないにしても——検討すべきであろう。また、盧溝橋事件前夜の日本側の華北における資源の制圧をめぐる対立も、中国側の現地における工業化の試みとの衝突とみるべきか、あるいは日本の工業基盤強化に対する中国側の抵抗と考

えるべきか、なお確定すべき点が残されているように思われる。しかしこれらの問題点や今後の課題は、本論文の構想と実証的成果への高い評価と学界への寄与を些かも損なうものではなく、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（経済学）の学位授与に十分に値するものであることを認め、研究科委員会にその旨報告するものである。